

2019 年度

一般選抜入学試験 問題集

国語総合



共栄大学

教育学部 / 国際経営学部

I 次の文章を読み、設問に答えよ。

① 孫娘がいつどんな時も、誰に対しても、一言も喋らないというのを知ったのは、引越してから十日ほどたった頃のことだった。

「あの子が挨拶一つしなくても、私の躰からだがなつてないからだなんて、思わないでくださいよ」

庭先で自転車に油を差していた男に向かい、未亡人は言った。

「昔はちゃんと喋ってたんだ。普通の子と同じように、アーアー、ウーウーからはじまって、マンマ、ママ、パパ、とね。もつともパパは家出しちゃって、行方知れずになっちゃっているけど。いや、普通以上だったかもしれない。絵本だつてすらすら読んでたし、童謡も上手に歌ってた」

「ところがちょうど二年前、あの子の母親が死んで、私が引き取ったその日から、ウンともスンとも口をきかなくなった。喉のどに何か詰まったのかと思つて耳鼻科にも連れて行つた。児童心理何とかの先生に診てもらつて箱庭も作つた。乾布摩擦、指圧、鍼、飲尿、断食、全部駄目。今年、小学校

に入学はしたけど、三日登校しただけだった。もうこうなつたら、本人が喋りなくなるまで待つしか、他に方法がないと思わないかい？ あの子がどんな声をしたか、私はもう忘れてしまつたよ」

未亡人はため息をつき、農道脇の切り株に座っている孫娘を見やった。自分のことが話題にのぼっていると気づいているのかいないのか、無心に少女は小枝で地面に絵を描いていた。

「じゃあ、今月分の家賃、そろそろ頼みますよ」

言いたいことだけ言うと未亡人は、家の中へ入つていった。

その後しばらく男は、自転車の整備をしていた。本当はさほどの整備を必要とする状態でもなかったのだが、少女の背景をわずかながら知らされた今、彼女を全く無視していいのか、それはやはり礼儀に反するのかわ、あれこれ考えているうちに、その場を立ち去るタイミングを逸してしまつたのだつた。一片の雲もなく晴れ渡つた昼下がりで、スモモの林はまぶしい光に包まれていた。

その時、農道の向こうから一台の軽トラックがやって来た。道の窪みに車輪を取られながら、大儀たいぎそうにガタガタと走っていた。舞い上がる砂埃すなぼこと日の光の中から、荷台すまに隙間なくびっしりと積まれた、色とりどりの、ふわふわと柔らかそうな何か少しづつ近づいてきた。

男と少女は同時に立ち上がった。その荷台は、古ぼけたトラックの様子とは不釣り合いに、ピンクや黄緑やブルーや朱色が混じり合った、愛らしいマーブル模様で彩られていた。しかも模様はひとときもじつとしておらず、たえずうごめいていた。やがてエンジン音をかき消すほどの、にぎやかすぎるさえずりが聞こえてきた。トラックは男と少女の間を走り過ぎていった。

ひよこか……と男はつぶやいた。どこかの緑日で売られるのだろう。さえずりはトラックが遠ざかった後も、風に乗って耳に届いてきた。少女は切り株の上で爪先立ちをし、じつと農道の先を見つめていた。マーブル模様が小さな一点になり、とうとう見えなくなつてもまだ、背伸びをし、耳を澄ませていた。

あたりに静けさが戻り、砂埃が晴れ、ようやく少女が切り株から下りた時、不意打ちのように二人の視線が合った。またしても男は訳もなくうろたえ、それを悟られまいとして機械油の染みたる布を握り締めた。相変わらず彼女は黙つたまま、視線を動かさず気配は見せなかった。

ア ああ、そうだ。ひよこだ。 イ

その瞬間、二人の間に、身振りでもない、もちろん言葉でもない、ただ、ひよこ、という名の虹が架かった。得心した様子で少女は、地面の絵を運動靴で消し、スカートの埃を払い、庭を横切つていった。その後ろ姿を見送りながら男は、自分だけに聞こえる小さな音で、自転車のベルを鳴らした。

②

ある日、夜勤明けの男が帰宅すると、階段の中ほどに少女が座っていた。

おはようと言つても返事が返つてこないのは分かつている。脇をすり抜けて二階へ上がるには、スペースが狭すぎる。お嬢ちゃん、ちよつとすまないがどいてくれるかな、と言つて無視されたら、ますます事態はややくこくなる。しかしそもそも、彼女はどのようにしてこんな所に腰掛けているのか？もしかして自分を待っていたのではないだろうか。いや、待つ必要がどこにある？ こんな自分に、一体、何の用事がある？

男は自問自答を繰り返した。少女を前にすると、なぜか余計なことを考えすぎてしまつた。なのに少女が何も悩んでいないように見えるのが、不公平に思えた。天窓から差し込む朝日が、ちょうど彼女の上に降り注いでいた。未亡人はもう販売所へ出勤したらしく、家の中はしんとしていた。

唐突に少女は、男に向けて掌を差し出した。言葉の前置きがないために、男にとつて、彼女のすることはすべてが唐突なのだつた。掌には、セミの抜け殻が載っていた。

うん、間違いない。セミの抜け殻だ。よく目を凝らして男は確かめた。ここから何かを読み取る必要があるとすれば、これは難問に違いない。まず、もうセミが鳴く季節になりましたね、という時候の挨拶と考えることができる。子供だつて、時候の挨拶くらいはするだろう。あるいは、自慢かもしれない。今年初めてのセミを見つけたのは私だと、自慢しているのだ。もしかすると、自分を驚かせようとしているのはあるまいか？ 急に気味の悪いものを見せて、びっくりさせて、大人をからかおうという魂胆だ。ならばもう手遅れではないか。自分はちよつとびっくりなどしなかった。

改めてよく見れば、少女の手は本当に小さかった。男が知っている、どんなものよりも小さかった。掌は、セミの抜け殻一個で一杯になるほどの面積しかなく、指はどれも、これで役に立つのかと心配になる大きさで、爪にいたっては、老眼の目にとつて無いも同然だった。にもかかわらず、ちゃんと大人と同じ形を持ち、関節も動き、指紋も手相もあることが、不思議だった。

その手の様子から、セミの抜け殻が単なる挨拶や脅かしてないことが、男にもだんだん分かってきた。抜け殻の足先一本でも傷つけないようにしようとする緊張が、掌にあふれていたし、息でどこかへ飛んでいかないよう、唇はしっかりと閉じられていた。それは彼女にとつてとても大事な抜け殻なのだった。

少女はそれを、男の胸元に差し出した。

「私に、くれるのかい？」

少女はうなずいた。男は細心の注意を払って抜け殻をつまみ上げた。あまりにも軽く、間違えて彼女の指をつまんでしまったのかと、錯覚するほどだった。男が礼を口にするとより前に、少女は階段を駆け下りていった。

男はセミの抜け殻を窓辺に飾り、しばらくそれを眺めたあと、ベッドにもぐり込んで眠った。

③

男が窓辺で過ごす時間のなかで一番好きなのは、夜明け前だった。闇が東の縁から順々に溶け出し、空が光の予感に染まりはじめる。一つずつ星が消え、月が遠ざかる。世界がこんなにも大胆に変化しようとしているのに、物音は一切しない。すべてが静けさに包まれて移り変わってゆく。

少女を真似て、男はセミの抜け殻を手に載せた。これは、プレゼント、というものののだろうか？夜明け前の静けさに向かって、男は問いかけた。かつて自分が誰かから、何かをプレゼントされたことがあったかどうか、思い出してみようとした。目を閉じ、遠い記憶を呼び覚まそうとしてみた。けれど、何一つ浮かんではこなかった。

だから男には、このセミの抜け殻が本当にプレゼントなのかどうか、正しく判断できなかった。自分がプレゼントだと思っただけで、少女の方にはちっともそのつもりがないとしたら大変なので、できるだけ抜け殻のことは考えないようにしているのだが、窓辺に腰掛けると、どうしてもそれを掌に載せてしまうのだった。

いつの間にか星は残らず姿を消し、朝焼けが広がろうとしていた。生まれたばかりのか細い光が、一筋、二筋、果樹園に差し込んでいた。しかし静けさはまだ、夜の名残に守られ、男の手の中にあつた。抜け殻に朝日が当たるまで、もうしばらくかかりそうだった。

④  
セミの次に少女が持ってきたのは、ヤゴの抜け殻だった。次がカタツムリの殻、ミノムシの糞、蟹の甲羅、と続いていた。圧巻はシマヘビの抜け殻で、直径二センチ、全長は五十センチもあり、それ一つで窓辺のスペースの半分近くを独占した。日に日に窓辺の抜け殻コレクションは充実していった。

少女はそれらを眺め満足そうな表情を見せた。二人は時折一緒に窓辺の時間を過ごすようになってきた。少女はコレクションの前にベタンと座り込み、男はその折々で、手持ち無沙汰に立っていることもあれば、彼女のためにジュースを注いでやることもあった。

最初のうち男は、こんなにも年の離れた、しかも喋らない人間と、どう間を持たせたいのか戸惑ったが、すぐに要領をつかんだ。つまり、抜け殻を眺めていけばいいのだ。それでは何の不足もなかった。

どの抜け殻にも、眺めれば眺めるほど、新しい発見があった。男がまず驚いたのは、脱皮した殻が実に精巧な作りをしていることだった。セミの腹に刻まれた皺から、頭部の先端に密集する毛まで。ヤゴの透明な眼球から、羽に浮き出す網目模様まで。かつて殻の中に生きていた生物の形を、克明に留めていた。隅々まで神経が行き届いていた。どうせ脱ぎ捨てられるものだから、といういい加減なところが微塵もなかった。

更には、それほど精巧でありながら、鈍びがないのだった。背中に一箇所、ファスナーのような切れ目がある以外、どこも破れたりクシャクシャになつたりしていない。シマヘビになると、そっくりそのまま裏返しになっていて、模様が内側に広がっているという手の込みようだった。

人間でもこんなに上手に洋服を脱ぐことは不可能だ、と男は思った。間違ひなくこれは、プレゼントに値する驚異だ、と一人で確信を深めたりもした。

しかし男はこう思った思ひのあれこれを、少女に向かって言葉にはしなかった。返事がもらえないからではなく、お互い喋らないでいる方が平等だ、という気がしたからだ。たとえ喋らなくても、少女のそばにいれば、彼女が抜け殻について自分と同じような発見をしていることが伝わってきた。彼女はそれらを入差し指でついたり、光にかざしたり、においをかいだりした。ちよつと考え込んだり、口元に微笑を浮かべたりした。少女が動くたび、肩先で三つ編みの結び目も揺れた。全部眺め終わった後は、順番と向きを間違えないよう、男が並べていた通りに元に戻した。

男は抜け殻と同じように、少女についても次々と発見をした。小ささは手に留まらず、身体中のあらゆる部分に及んでいた。鼻も耳も背中も、ただ小さいというだけで、神様が特別丹精を込めた感じがした。髪の毛は甘い香りがした。瞳の黒色はあまりにも深く、それが何かを見るためのものだということを、忘れそうなほどだった。自分も六つの時は、こんなふうだったのだろうかと思う

だけで、訳もなく哀しくなった。

「どこにいるんだい。さあ、ご飯の支度、できたよ」

台所で未亡人が、少女を呼んでいた。

⑤

ひよこトラックが二度めに農道を通った時、少女はちょうど男の部屋にいた。ガタガタとしたエンジン音の響きだけで、二人はすぐに何が近づいてきているのか分かった。男は窓を開けた。

同じように荷台は色とりどりのひよこで埋まっていた。例のさえずりも聞こえてきた。少女は顔を輝かせ、精一杯爪先立ちをした。吊りスカートが持ち上がって、パンツが見えるのではないかと、男は気が気ではなかった。しかし少女はそんなことにはお構いなく、少しでもひよこに近づこうとして窓枠から身を乗り出した。彼女が落ちないよう、男はスカートの紐を引っ張った。

ウ ああ、そうだ、ひよこだ。

二回めともなれば、目配せの確認も簡潔に済んだ。少女は手すりを握り締め、瞬きをするのも惜しいといった様子だった。風景の中で、そのトラックの荷台だけが別格だった。光を浴びる羽毛は花園であり、湧き上がるさえずりは歓喜のコーラスだった。

けれど男は知っていた。着色されたひよこたちは、長生きできないということ。縁日の人込みの中、ハロゲンライトに照らされながら、彼らは窮屈な箱に押し込められる。乱暴に首をつかまれ、足を引っ張られる。買われた先ではすぐに飽きられ、羽の色もいつしかあせ、糞まみれになって衰弱する。あるいは猫に食べられる。売れ残ったひよこは、箱の片隅で、窒息死している。

少女が何も喋らない子供でよかったと、その時男は初めて思った。もし少女に、「ひよこたちはどこへ行くの？」

と尋ねられたら、自分はきつと答えに詰まるだろう。本当のことを言うべきか嘘をつくべきか分からず、うろたえてしまうだろう。

E しかし二人は言葉を発しないのだから、少女の黒い瞳の中では、ひよこはどこへも行けるのだ。虹を渡った先にある楽園で、可愛い色の羽をバタバタさせながら、いつまでも幸福に暮らすのだ。

⑥

新しいコレクションとして少女が選んだのは卵だった。彼女が裁縫箱と卵を持って二階へ上がった時、どういふつもりなのか意図がつかめなかった。最初は卵を卵としてひよこにしたいのかと思った。少女は裁縫箱から針を一本取り出し、それで卵をつつく真似をした。

はあ、卵に針で穴を開けて、中身を吸い出したんだな。なるほど。卵の殻も立派な抜け殻だ。

早速男は作業に取り掛かった。これまでのコレクションは全部、少女が一人でどこから見つけてきたものだった。しかし今回は二人の共同作業だ。自分の働きが大事なポイントとなる。セミやヤゴに負けない立派な抜け殻を完成させなければならない。だから男は張り切っていた。

できるだけ目立たない穴にするため、細心の注意を払って男は卵のお尻に針を突き刺し、そこに唇をあてがった。少女はベッドの縁に腰掛け、じっと成り行きを見つめていた。正直なところ男は生卵があまり好きではなかったのだが、期待に満ちた少女の瞳を前に、嫌そうな表情を見せることなどできるわけがなかった。平気、平気、私に任せておきなさい、という態度を保ち続けた。

やがてぬるぬるとした生臭い粘液が喉に流れ込んできた。唇に触れる殻はひんやりとし、ざらついていた。男は気分が悪くなりそうなのをこらえ、味わう暇を与えない勢いでそれを飲み込み続けた。すぼめた唇と殻の隙間から息が漏れ、奇妙な音がした。

だんだんに男は、縁日で死んだひよこを飲み込んでいるような気持ちになってきた。着色され、ぎゅうぎゅう詰めにされ、遠くへ運ばれた拳句、一人ぼっちで死んでいったひよこを、自分は今申っているのだ。少女に気づかれぬよう、そっと花園に埋葬しているのだ。

男は目を閉じ、最後の一滴まで、すべてを吸い尽くした。少女はベッドの上で足を揺らしながら拍手をした。二人の間に、白い小さな抜け殻が一個、残された。男はそれを窓辺のコレクションに加えた。卵はすぐに他の抜け殻たちと上手く馴染んだ。少女の拍手が一段と大きくなった。

⑦

男は相変わらずホテルの玄関に立ち続けた。自転車を四十分走らせ、ロッカーで制服に着替え、回転扉の前に立った。タクシーが着くと、お客の手から荷物を受け取り、「本日、ご宿泊でございますか？」と尋ねた。フロントまで案内しているあいだに、もう次の新しい客が到着していた。男は一日中、ただ玄関の内と外を出たり入ったりしているだけだった。誰も男の顔など見なかったし、名前も覚えなかった。ごくたまに、「ありがとう」と声を掛けてくれる客もあったが、そのたびに男は、礼を言われるような何かを自分にしたのだろうか、という気分になった。

同僚のドアマンたちは皆、男よりずっと若かった。男より力強く、ハンサムで、制服がよく似合った。食堂やロッカーで一緒になっても、雑談することはなかった。彼らが男に話し掛けてくるのは、勤務シフトを交代してほしい時だけだった。

新しい下宿に引っ越してから、一つだけ変わったことがあった。子供連れの客が来ると、つい少女と比べてしまうのだ。この子は少女と同じくらいだろうか。いや、熊の糞いぐるみなど抱いているところを見ると、少女よりは幼稚だ。あのロビーで走り回っている子。あれはいけない。いくら子供でも分別がなさすぎる。少女ならきつと背筋をのばし、何十分でももちろん静かに、ソファア

に座っていられるはずだ。こっちの子はどうだろう。身長も目方もほぼ同じくらいだが、顔は全く似ていない。少女の方がずつと可愛らしい……。こんな具合だった。

どうして少女が抜け殻を集めるのか、男は不思議に思わなかった。少女には縫いぐるみよりも抜け殻の方がよく似合っている気がした。抜け殻を求め、果樹園や用水路の水辺を探索している彼女が、草むらをかき分け、枝を挿すり、泥を掘り返す。白いソックスが汚れ、三つ編みが解けそうになる。ようやく少女は一個の抜け殻を発見する。ついさっきまで生き物だったのに、今では空っぽの器になり、見捨てられてしまった抜け殻。中には沈黙が詰まっている。少女はそれを救い出し、大事に掌に包み、男の元へ走って届けるのだ。

⑧

三度めの時、少女はもう、ひよこトラックについて相当の知識を蓄えていたので、姿が見えるずっと前にエンジン音をキャッチし、階段を駆け下りていった。男も後を追いかけた。少女は切り株に立ち、いつそれがやって来てもいいように、体勢を整えていた。

少女は間違えていなかった。一本道のずつと向こうから、トラックはやって来た。

エ

少女は得意げな顔をして見せた。

うん、本当だ。

男はうなずいた。

太陽を背に、トラックの荷台は、四隅までわずかの隙間もなくひよこたちの鮮やかな羽に埋め尽くされていた。たとえあと一羽でも、余分に乗せることは無理だろうと思われた。

男の目には、いつもよりトラックのスピードが遅く、ふらついているように映った。荷台が揺れるたび、さえずりは更にトーンを上げ、波のようにうねりながら空の高いところまで響き渡っていた。少女は切り株の上でジャンプしていた。

私たちにひよこを十分見せてやろうとして、わざとゆっくり走っているのだろうか。そう、男が思った時、トラックは二人の前を通り過ぎ、農道を外れ、草むらに入り込み、そのままプラタナスの木にぶつかって横転した。あつ、と声を出す暇もない間の出来事だった。

男は慌ててトラックに駆け寄った。運転手は自力で外へ這い出して来た。額から血が出ていたが意識ははっきりしていた。

「大丈夫か。しっかりしろよ。大家さん、大家さん。すぐに救急車を呼んで」

男は大声で家の中の未亡人に呼びかけた。それから運転手の首に巻かれていたタオルで傷口を押

さえ、もう片方の手で身体をさすった。

ふと、男が視線を上げると、そこはひよこたちで一杯だった。視界のすべてをひよこが埋め尽くしていた。突然荷台から放り出された彼らは、興奮し、混乱し、やけを起こしていた。ある群れは意味もなくその場で渦巻きを作り、ある群れは空に逃げようというのか、未熟な羽をばたつかせ、またある群れは身体を寄せ合い、打ち震えていた。

その風景の中に、少女がいた。

「駄目よ。そっちへ行つては、車が来たらはねられてしまう。そう、皆、この木陰に集まって。怖がらなくてもいいのよ。大丈夫。すぐに助けが来るわ。何の心配もいらぬの」

少女は彼らを誘導し、元気づけ、恐怖に立ち凍<sub>凍</sub>んでいるひよこを、胸に抱いて温めた。色とりどりの羽が舞い上がり、少女を包んでいた。

F  
これが彼女からの本当のプレゼントだと、その時男は分かった。少女が聞かせてくれた声。これが、自分が与えられたかけがえのない贈り物だ、と。

男は何度も繰り返し少女の声を耳によみがえらせた。それはひよこたちのさえずりにかき消されることなく、いつまでも男の胸の中に響いていた。

(小川洋子「ひよこトラック」による)

問一 傍線部 A「大儀そうに」とあるが、「大儀そうに」の意味として最も適当なものを、1～5のうちより一つ選べ。

- 1 その気が起こらず面倒そうに。
- 2 乱暴で危なそうに。
- 3 軽やかで気持ちよさそうに。
- 4 いらいらして機嫌が悪そうに。
- 5 仕事が多くて忙しそうに。

問二 傍線部 B「ただ、ひよこ、という名の虹が架かった」とあるが、これは何を意味しているか。

- 1 1～5のうちより最も適当なものを一つ選べ。
- 2 二人がお互いの境遇を知ったということ。
- 3 二人がひよこを幸せの象徴だと理解したということ。
- 4 二人が心を通わせる手段をもったということ。
- 5 二人がこれから先の日々を希望をもったということ。

問三 傍線部 C「得心した様子で」とあるが、「得心」の意味として最も適当なものを、1～5のうちより一つ選べ。

- 1 心が晴れて機嫌がよいこと。
- 2 物事にこだわらないこと。
- 3 心残りでも別にいいこと。
- 4 何となく恥ずかしいこと。
- 5 十分にわかり納得すること。

問四 傍線部 D「男は細心の注意を払って抜け殻をつまみ上げた」とあるが、このときの男の気持ちはどのようなものか。1～5のうちより最も適当なものを一つ選べ。

- 1 少女はまだ子供なのだから温かく見守ってあげようという気持ち。
- 2 男にとって初めてのプレゼントだったので丁寧に扱おうという気持ち。
- 3 大事な抜け殻を男にくれる少女の思いを大切にしようという気持ち。
- 4 抜け殻の繊細さに驚いてじっくり観察しようという気持ち。
- 5 言葉を失っている少女をこれ以上傷つけてはいけないという気持ち。

問五 傍線部 E「しかし二人は言葉を発しないのだから、少女の黒い瞳の中では、ひよこはどこへも行けるのだ」とあるが、これはどのようなことをあらわしているか。1～5のうちより最も適当なものを一つ選べ。

- 1 少女は男に答えを求めず、男も答えを与えないから、少女はどこまでも想像を広げる自由をもつことができるということ。
- 2 男も少女も言葉を声に出すことができないので、お互いに相手の思いを都合よく解釈することができるということ。
- 3 少女が話さないで男も話さないから、少女が真実に目を向けないことに対して、男は責任を感じる必要がないということ。
- 4 少女は言葉を喋らず、誰にも心を聞かないので、いつまでも無垢な子供のままでいられるということ。
- 5 少女は、言葉を喋れないために世間のつらさや悲しさから逃れられるので、決して不幸ではなくむしろ幸せであるということ。

問六 傍線部 F「これが彼女からの本当のプレゼントだと、その時男は分かった。少女が聞かせてくれた声。これこそが、自分だけに与えられたかけがえのない贈り物だ」とあるが、この「本当のプレゼント」「かけがえのない贈り物」とは、何を意味しているか。1～5のうちより最も適当なものを一つ選べ。

- 1 男は、少女が言葉を取り戻すことを願って接してきたが、ようやくその緊張から解放されたこと。
- 2 少女が言葉を取り戻したことで、次は男のほうに、何かを得られる順番がまわってきたこと。
- 3 少女の声と言葉に、男への感謝の気持ちが感じられて、男のこれまでの心遣いが報われたこと。
- 4 生命のない抜け殻を救ってきた少女が、生命のあるひよこを救う声を、男に聞かせてくれたこと。
- 5 男が、少女の初めての声を聞く者となり、少女の祖母にそのことを伝える人になれたこと。

問七 空欄 ア ～ エ に入る少女の言葉を、1～4のうちよりそれぞれ一つ選べ。

- 1 ほらね。やっぱりね。
- 2 やっぱりそうなのね。ひよこだったんだわ。
- 3 ひよこよね。
- 4 あれは、ひよこ？ ひよこよね。

問八 この文章は、①～⑧の八つの大きな段落(まとまり)で構成されているが、その意図は何か。1～5のうちより最も適当なものを一つ選べ。

- 1 物語のなかの時間経過の順によらずに、八つの段落を不規則に配置することによって、男と少女の孤独をきわだたせ、読者が二人に感情移入しやすくなる意図がある。
- 2 「ひよこトラックが登場する段落」の合間に「抜け殻が登場する段落」をはさんで配置することによって、男と少女の交流が次第に深まるようすをあらわす意図がある。
- 3 八つの段落を配置して頻りに場面を転換させることによって、単純な筋立てに変化を与えて読者の興味と関心をつなぎ、物語に引き込もうとする意図がある。
- 4 少女が登場しない段落を八つのうち五つ設け、男の暮らして仕事を丁寧に描くことによって、この物語の主人公が少女ではなく男であることを明らかにする意図がある。
- 5 現在から過去へとさかのぼる物語の時間軸に沿って八つの段落を配置することによって、冒頭の男と少女の出会いが運命的なものであることを印象づける意図がある。

II 次の文章を読み、設問に答えよ。

つい何日前か、NHKで里山<sup>A</sup>の番組を見た。人が自然と共に生きている琵琶湖西岸の美しい映像であった。ぼくは自然の中に吸い込まれていくような気持ちでじっと見入っていた。

そのうちにぼくはふと気づいた。自然の中に吸い込まれるというこの表現は、里山については適切なものではないのではないかとということに。

なぜならいつも言われているとおり、「里山」はけっして「自然」ではないからである。

もともとの自然の中に人間が入っていき、木を伐ったり、草を刈ったり、いろいろな働きかけをしていることよって生まれたもの、それが里山である。

もともとの自然は深くこんもりした林であっただろう。そこはあまり日もささず、うす暗くひんやりしていて、あまり快適な場所ではなかったにちがいない。少なくともそこに腰をおろし、のんびり弁当でも開いてくつろごうという気になる場所ではなかったろう。

しかし人が入って行って薪にする木を採り、小屋を建てる材木を伐り出し、あるいは林の縁を切り開いて小さな畑を作ったりというようなことをしていくと、林は少し明るくなり、やがて明るい場所を好む草や灌木も生えてくる。

その草木に花が咲けば蝶もやってくるし、花蜂たちも訪れる。草木にはいろいろな虫がついて葉を食べる。そしてそのような虫たちを求めて小鳥たちも姿を見せる。きっとこんなふうにして林は少しずつ変わっていったのだろう。

そこにはいわゆるエコトーン<sup>C</sup>、すなわち自然の傾斜ができてくる。深い林から少し開けた明るい林、そして草地、畑、人家という傾斜が。

これが「里山」なのだとはくは思っている。つまり里山は「里山」という「山」ではなく、人と自然が交錯するところ、基本的には人里なのである。

そこでは人と自然が共に生きているのではない。人は自然の中に入って行って、自然に何らかの働きかけをする。そこをただ歩くだけでも、それは働きかけである。人は地面に生えた草を踏み、何匹かの虫を払い落としたり踏みつぶしたりする。木も伐るであらうし、草も刈る。

しかし自然も負けていない。伐られた木は元の状態に戻ろうとして若枝を伸ばし、草はまた生えてくる。虫たちもせっせと子孫を残す。こうして人と自然の ア が続いていく。これが里山であり、人里である。

こうして生まれた里山は、もともとの深く暗い林とちがって、人間が親しみと安らぎをおぼえる場所になる。それが近年の里山賛美の源であることは疑いない。

けれど里山を賛美するあまり、奇妙なこともおこっている。たとえば里山への人の立ち入りを禁止したり規制したりというものもその一つだ。

人が入って働きかけることを止めれば、里山の自然はたちまちにして元へ戻っていく。それは人間の入って行きにくい、少なくともあまり快適ではない場所になってしまいい、たちまちにして里山<sup>D</sup>の「荒廃」がおこる。今や各地で、里山の荒廃が問題とされるに至っている。

その一方、里山の美への憧れはますます高まっている。里山の美しい映像は人々の心を打ってやまない。どうやら人々は、そこに自然の美を求めているように思える。今や、人工の美ではなく自然の美を求める気持ちになってきたのだろうか？ もしそうであるのなら、それは喜ばしいことであろう。

でも果たしてこれで十分なのだろうか、ぼくはときとき考える。

少し前に述べたとおり、里山はけっして自然そのものではない。それは自然と人間の イ の産物なのである。もしこのことを忘れれば、人間は徹底した自然と徹底した人工とを求めることになりはしないだろうか？ それは何か非現実的で不自然なことになってしまいうような気がしてくる。

地球上で徹底した自然というのは、地震とか噴火とか暴風、大雨などのように、人間にとつて恐ろしいものであることが多い。人間はそれを求めてはいないし、美しいものとも思っていない。

一方、人間は人工物を徹底的に発達させ、その利便性を享受している。

それはそれでよいのだし、それが人間の偉大さでもあるのだが、人々はそこに二抹の不安も感じている。その反動が自然礼賛の源であることも否めない。どうやら人間は、何か両極端 E の間をさ迷っているのではないだろうか？

そんなふうにも思ってみると、里山<sup>F</sup> というのは意味ぶかいものである。それは繰り返して言うとおおり、里山が自然と人間の ウ の産物だからである。

人間は雨露をしのぎ、できるだけ快適に暮らすために、自然の一部を破壊して家を建て、町を作る。家や町の中に自然が入り込んできてはくはない。そこで人間は自分のまわりを管理する。

庭は自分の思うようにしつらえ、道も交通も管理する。子どもの遊び場までもきちんとしつらえ、人工の遊具を設置する。都市は計画的に作られ、建物もできるだけ自動化する。こうして能う限り利便性に富み、安全な人工的環境ができあがる。けれどたえず報道されるとおり、そこにはさまざま エ さまざまな予見しがたい危険が絶えないのだ。

人間と自然の エ の結果として生まれた里山は、これとはかなり異なっている。

それはそれほど利便性に富んだものではない。けれどそこでは何らかの安らぎを感じる事ができる。危険はないことはない。早い話がうっかりすれば蚊やときには蜂に刺される。子どもが木に登って遊んでいれば、落ちることもあろう。けれどその危険の多くは、人工的遊具の場合と違って予見できる。そういう危険を予見するトレーニングは、生きていく上で不可欠である。

自然を追い払ってすべてを人工的に管理することより、身のまわりに自然とのせめぎあいの場を残した人里に生きるほうが楽しいのではなからうか。

(日高敏隆「里山物語」による)

問一 傍線部 A「番組」のような読み方は、一般的に何と呼ばれているか。1～3のうちより一つ選べ。また、その読み方をする熟語を、4～6のうちより一つ選べ。なお、二つとも正答の場合のみ得点を与えるものとする。

- 1 重箱読み                    2 熟字調  
3 湯桶読み  
4 手本                        5 味方  
6 田舎

問二 傍線部 B「里山」はけつして「自然」ではないからである」とあるが、ここで使われている「自然」とはどのような意味か。1～5のうちより最も適当なものを一つ選べ。

- 1 人の手で造り上げられた自然。                    2 人の手で保護されている自然。  
3 人の手が加えられていない自然。                    4 人の手が行き届いていない自然。  
5 人の手で荒廃させられた自然。

問三 傍線部 C「そこにはいわゆるエコトーン、すなわち自然の傾斜ができてくる」とあるが、「自然の傾斜」はなぜできるのか。1～5のうちより最も適当なものを一つ選べ。

- 1 人間が自然に働きかけた場所に応じて、自然が元の自然を保つ方向に変化していくから。  
2 人間が自然に働きかけた度合いに応じて、自然がそれに適応した姿に変化していくから。  
3 人間が自然に働きかけた場所に応じて、自然が少し開けた明るい林や草地に変化していくから。  
4 人間が自然に働きかけた度合いに応じて、自然が人間にとって快適な状態に変化していくから。  
5 人間が自然に働きかけた場所に応じて、自然がそれによって徐々に荒廃していくから。

問四 空欄「ア」～「エ」には、共通する五文字の言葉が入る。Iの範囲からその言葉を抜き出すとすると、三文字目となる文字は何になるか。1～3のうちより一つ選べ。また、その言葉の意味として最も適当なものを、4～6のうちより一つ選べ。なお、二つとも正答の場合のみ得点を与えるものとする。

- 1 的                            2 き                            3 の  
4 協力し合って信頼のもとでバランスを保つこと。  
5 互いに我慢をしながら支えあいながら共存すること。  
6 優秀のつかないまま攻防を繰り返すこと。

問五 傍線部 D「里山の『荒廃』とあるが、これはどのような意味か。1～5のうちより最も適当なものを一つ選べ。

- 1 里山の自然が元の自然に戻っていくこと。  
2 里山の自然が本来の自然の美を失うこと。  
3 里山の自然が人によって荒らされること。  
4 里山の自然が人工的に管理をされること。  
5 里山の自然が人の立ち入りを拒むこと。

問六 傍線部 E「両極端」とあるが、これが指している内容を、傍線部 Eより前の本文から十三文字抜き出した場合、三文字目となる文字は何になるか。1～5のうちより一つ選べ。

- 1 さ                            2 し                            3 す                            4 せ                            5 そ

問七 傍線部 F「里山」というのは意味ぶかいものである」とあるが、筆者がどのように考える理由は何か。1～5のうちより最も適当なものを一つ選べ。

- 1 里山は、徹底した自然の美の象徴であり、科学の力により徹底した人工物を発達させた世界に不安を感じる人間に、安心と親しみを感じさせる場所だと考えるから。  
2 里山は、人間が人工物を徹底的に発達させた姿であり、自然の脅威から身を守ろうとした人間に、安らぎと利便を同時に与えるようになった場所だと考えるから。  
3 里山は、美を求める人間がそこが徹底的に自然そのものであると同時に、あらゆる人工物の利便をも与え続けてくれる、映像通りの美しい場所だと考えるから。  
4 里山は、人間が恐れるような徹底した自然でもなく、一抹の不安を感じるような極端な人工物でもなく、人間が親しみと安らぎを感じる場所だと考えるから。  
5 里山は、人々に自然の中に吸い込まれそうな気持ちを抱かせるが、入りたいたいと思えば立ち入りが禁止されるように、なかなか自由にならない場所だと考えるから。

問八 筆者の主張を効果的に表現するために、本文の構成はどのように工夫されているか。1～5のうちより最も適当なものを一つ選べ。

- 1 まず筆者の主張を述べ、次にその主張の根拠を位置づけ、その後で根拠となる具体例を複数提示するという頭括型の構成にして読者を引きつけている。  
2 読者が認識していることについて、その正確性に欠ける箇所を指摘しつつも、認識しているということ自体を肯定的に受けとめて筆者の主張に結びつけている。  
3 最初に筆者の認識を述べ、読者の認識とのズレを指摘し、それを比較検討することによってそれぞれのよさを生かしあつていくような主張を展開している。  
4 最後に筆者の主張を述べるために、現在人間が置かれている環境について科学者という視点から鋭く分析を行い、これから人間として実現可能なものを具体的に示している。  
5 読者の興味関心を引きつけるために、読者が誤解しているという事実を突きつけ、読者が自ら正解を考えられるように提案を行っている。

Ⅲ 次に示すものは、ある大学の教員同士 (K 先生と A 先生) の会話である。これを読み、各設問に答えよ。

K いやよい入試の時期ですね。A 先生はどのような学生が入学してくることを期待しますか。

A やはり、日本語をしっかり使いこなせる学生に入学してほしいですね。日本語を第一言語とする人は、日本語によつてものごとを考へているわけですね。日本語がしっかり使いこなせないということは、しっかり考へられないということですから、大学における専門教育にはついてくることが難しくなつてしまいます。

K 本当にそうですね。その考へを表現する際には、正しい日本語を用いることはもちろんですが、豊かな日本語を用いることも求められますね。

A 正しさと云へば、まずは漢字や語彙ですね。大学においてはレポートをたくさん書いていくこととなります。その中で必要最低限の漢字は正しく使い、さらに適切な言葉を用いてほしいですね。豊かさに関しては、先人の知恵の結晶であることわざや故事成語、慣用句なども常識として知っていることが大切です。

A すばらしい新入生がきてくれるとよいですね。期待しましょう。

問一 会話文中の傍線部 A 「日本語によつてものごとを考へている」ということについての問題である。

ある暗号で「イス」が「01-10」、「ハル」が「03-11」、「ホロ」が「05-02」で表されるとき、同じ暗号の法則で「07-08」と表されるものはどれか。1〜5のうち最も適当なものを一つ選べ。

- 1 チカ                      2 シリ                      3 トチ                      4 トリ                      5 リカ

問二 会話文中の傍線部 B 「漢字や語彙」についての問題である。以下の指示に従つて答えよ。

(一) 次のア〜ウの各文の傍線部の読みを平仮名で記した場合、読みの二文字目にあたる平仮名として最も適当なものを、それぞれ 1〜8 のうちより一つ選べ。

ア この仕事はとても煩わしい。  
イ 怠惰な部下を戒めた。

ウ 犬が威嚇するように吠えていた。

- 1 ま                      2 か                      3 ず                      4 く  
5 せ                      6 し                      7 ど                      8 た

(二) 次のア〜ウの各文の片仮名と同じ漢字を用いるものを、それぞれの後にある 1〜5 のうちより一つ選べ。

ア 相続することについての権利を 100% 放棄した。

1 注意を喚起する。                      2 臨キ応変な対応をする。

3 論理的なキ結となる。                      4 控訴をキ却する。

5 キ存の考へを改める。

イ 絶対的な規ハンとして会社内に位置づけられている。

1 無料でハン布する。                      2 柔道の師ハンになる。

3 ハン栄を築く。                      4 ハン断に苦しむ。

5 藻がハン茂する。

ウ その問題についての考へ方の輪カクを明確にした。

1 カク壁を取り除く。                      2 外カク団体をつくる。

3 組カクが発表される。                      4 念入りにカク策する。

5 組織のカク充をねらう。

問三 会話文中の傍線部 C 「ことわざや故事成語、慣用句」についての問題である。以下の指示に従つて答えよ。

(一) 「青天の霹靂」という故事成語はどのような意味をもつか。1〜5 のうち最も適当なものをも一つ選べ。

1 思いがけない出来事のこと。                      2 顔が青ざめてしまうようなこと。

3 晴れ渡るような気持ちのこと。                      4 全く何も無い状態におかれること。

5 予想どおりに事が展開すること。

(二) 「寝耳に水」という慣用句はどのような意味をもつか。1〜10 のうち最も意味の近い熟語をも一つ選べ。

1 幸運                      2 多忙                      3 無用                      4 用心                      5 無敵

6 夢中                      7 忠告                      8 得意                      9 忍耐                      10 不意

【国語総合】

I

設問	解答	
問一	1	
問二	3	
問三	5	
問四	3	
問五	1	
問六	4	
問七	ア	4
	イ	2
	ウ	3
	エ	1
問八	2	

※問七はア～エすべて正答の場合のみ正解

II

設問	解答
問一	1・5
問二	3
問三	2
問四	2・6
問五	1
問六	2
問七	4
問八	2

※問一、問四は両方正答の場合のみ正解

III

設問	解答	
問一	3	
問二	ア	3
	(一) イ	1
	ウ	2
	(二) ア	4
	イ	2
	ウ	2
問三	(一)	1
	(二)	10



# 共栄大学

学務部 入試担当

〒344-0051 埼玉県春日部市内牧 4158  
電 話 048-755-2490 (直通)